

館林キリスト教会

デボーションノート(2010年)

1月 1日 今日の通読箇所 詩篇 125 篇 1~5

「平安と祝福」

一連の「都詣での詩篇」を読むと、いかにイスラエル人が、彼らの平安と祝福のシンボルとしてエルサレムを愛していたかが思われる。山々がエルサレムを囲むように、神は我々と家族を囲み守って下さる。悪い勢力がこの町を侵略することを許さないように、主は我々を祝福して下さる。ああエルサレムよ。堅固にそびえ立つ城壁よ。栄光に輝く神殿よ。永久に平安あれ。これは今クリスチャンが、自分の教会、牧師、教会員を愛し祈るのとよく似ている。

1月 2日 今日の通読箇所 詩篇 第126 篇 1~6

「喜びの収穫」

亡国のイスラエルの長い苦しみと祈りが実って、シオン(エルサレム)の繁栄は回復し、教会の長い祈りと伝道の労苦も報いられ、多くの収穫が得られた。ここにその二つの喜びと感謝が歌われている。昨年の特集集会で我々はこれを経験した。しかし地上では伝道の収穫、結果を完全に見ることは許されない。やがて主の再臨のとき「彼らのそれぞれの労にしがって」報いられるのである。そのなぐさめの時を夢見て、さあ今年も、伝道に、主の業に励もう。

1月 3日 今日の通読箇所 詩篇 第127 篇 1~5

「休息の祝福」

もし生活や成功が人間の勤労に正比例するなら、とても休んでなどいられないような気もする。しかし「不眠不休」は勇ましいが、それではたまらないし体も壊してしまうだろう。この詩篇に「主が祝福して下さらなければ人間の不眠不休の勤労も空しい」と書いてある。その反面人が眠っている間でも必要な糧は、主が備えてくださるのだ。「疲れたら休もう。彼らも遠くは行くまい」ツルゲーネフ。私はこの言葉が好きだ。摂理を信ずる者に安息がある。

1月 4日 今日の通読箇所 詩篇 第128 篇 1~6

「クリスチャンホーム」

ここにクリスチャンホームの祝福が描写されている。主人は丈夫で、正当な勤労の収入によって家族ともども満足し、安らかに幸福に暮している。奥さんはいつも美しく、贅沢は言わずに、ぶどうの木が豊かな実を結ぶように主人の収

入を上手に切り盛りする。元気な子供たちが食卓の周りを囲むと本当にオリーブの若木ようだ。その人たちの集まる教会(エルサレム)も、やはり主の祝福のもとに繁栄している。なんとすばらしいことではありませんか。

1月 5日 今日の通読箇所 詩篇 第129篇1~8

「ペンペン草」

聖書に「正しい者は悩みが多い」と書かれている。正しいが故に損もし、世間一般の人からは締め出されて孤立する。場合によっては迫害を受ける。これはしばしばクリスチャンの悩みだ。しかし物事は信仰をもって長い目で見なければならぬ。やがてこの詩篇のように、罪人は枯れ果て屋根のペンペン草のごとくなり、哀れ刈り取ってみてもその空しいこと束にもならず手にも充たない。昔の威勢や大言壮語はどこに行ったのか、という小気味のいい結果だ。

1月 6日 今日の通読箇所 詩篇 第130篇1~8

「主を待ち望む」

洪水の時、水の中で何かにはさまれて自分では動けない人が、ただ救出を待つ姿をテレビで見ることがある。詩人も「深い淵から呼ばれる」と、苦しみの中で主を待ち望む祈りの態度を歌っている。すぐには見えてこない祈りの答えを、あくまで疑わずに忍耐して待つ姿なのだ。人の救助はしばしば失敗する。しかしよし遅く見えても、祈りに対する神の応答と救助は確実なのだ。

1月 7日 今日の通読箇所 詩篇 第131篇1~3

「キーキー言うまい」

人間は理想大志を抱き勇気をもって奮闘するのも大切だ。しかし分不相応な野心競争心のために眉を釣り上げ焦燥し、また完全主義の注文を自分につけすぎてイライラし、結局ノイローゼになり、病気にもなるというケースもなかなか多い。節度と、謙遜と、平安と。これもまた聖霊の実です。「信仰の平安」を失うのは神のみ心ではない。「ずいぶん頑張るがキーキー言わない。顔を汗だらけにしない」のは、クリスチャンらしくていいものだと思いますが。

1月 8日 今日の通読箇所 詩篇 第132篇1~18

「聖所の再建」

神の臨在の象徴として聖所の奥深くにあった契約の箱が、ペリシテに奪われ、やがて帰されたものの、イスラエルの辺境にほとんど放置された時代があった。これはイスラエルの衰微の象徴だった。国王として立てられ、国の指導に当たったダビデは、契約の箱のエルサレム鎮座と聖所の再建を夢にも忘れたことは

なかった。これはその祈りの詩であって、ダビデの敬虔がよく現われている。聖所と礼拝の再建整備こそ彼の使命で、国家の祝福の象徴だったのだ。

1月 9日 今日の通読箇所 詩篇 第133篇1～3

「ヘルモンの雪水」

祭司アロンの任命式に、頭に香水が注がれる。香水は衣の細かい繊維の間を潤し流れ、その裾までが香る。またイスラエルでは今でもヘルモン山の雪水で全国を灌漑している。もちろん最新の技術と、巨大な土木工事のおかげだ。太い地下のパイプで運ばれる水はスプリンクラーで全国の農場を潤す。これこそイスラエルにとって命の水なのだ。そのように今家庭、教会に集まる兄弟姉妹が、いつも仲良く心を合わせて祈るならば、頭なるキリストに注がれている聖霊の水は全てのメンバーに洩れなくゆきわたり、恵みと力に満たすという。何と魅力的で力強い集合であるか。

1月10日 今日の通読箇所 詩篇 第134篇1～3

「深夜の祈り」

人の寝静まった夜も当番の祭司は神殿に出勤し、徹夜で神に仕えまた人々のために祈る。我々も深夜目覚めて、人知れずなにくれと会衆のために祈ることがある。子供のことを思って夜もまぶたが合わず、涙して祈った経験はクリスチャンの親たちに多いだろう。また何か問題のあるとき、志のあるものが特に徹夜の祈り会を持つこともある。「主よ夜の祈りに答えたまえ。彼等をして主をほむるに至らせたまえ」この詩篇の作者は、そう歌っているようだ。

1月11日 今日の通読箇所 詩篇 第135篇1～21

「主の選民」

宇宙と世界を造り、約束のみことばに忠実な真の神に選ばれた民族であることは、イスラエルにとって最高の誇りであり名誉だった。神はエジプトにおいて、また荒野の旅行とカナン侵入において、イスラエルを救うために多くの奇跡を現わして下さった。依然として偶像礼拝しか知らない異邦人に比べて何という特権であろうか。私達も同じく選ばれたものとして多くの祝福を経験してきた。イスラエルに負けないように、常に主に感謝、賛美を捧げよう。

1月12日 今日の通読箇所 アモス書1章1～12

「アマチュア預言」

7章 14,15 節に「アモスは答えた、『わたしは預言者でもなく、また預言者の子でもない。わたしは牧者である。わたしはいちじく桑の木を作る者である。』と

ころが主は群れに従っている所からわたしを取り、『行って、わが民イスラエルに預言せよ』と、主はわたしに言われた」。とあるのは彼の履歴であって、彼はいわゆる専門の預言者ではなかった。また3章8節に「ししがほえる、だれが恐れないでいられよう。主なる神が語られる、だれが預言しないでいられよう」。などとあるのは、彼の預言の本質を示すものと言えよう。この章で彼は、常にイスラエルに敵対した、スリヤ、ペリシテ、フェニキアなどの周辺諸国の、恐るべき終末の裁きを警告し、かつ預言する。

1月13日 今日に通読箇所 アモス書2章1～16

「残虐行為」

1章から2章の始めにかけて、イスラエル攻撃に際して行った諸国の残虐行為が記してある。戦争には理由があろう。しかし戦争には理由のない残虐行為が付きものだ。神は乱軍の中で行われた、隠れた残虐行為をすべてみそなわし、確実に罰するのだ。しかしイスラエルはなぜかくも残虐な攻撃にさらされたのか。その理由が4節以下に書いてある。彼らは神を離れ神の道を離れた。その結果、有力者、金持ち、宗教家はほしいままに貧しく弱い者を圧迫した。(7節のように、弱い女性は、強い男性の欲望のままに恥辱を受ける)それゆえトラックが人を轢き潰すような外国の侵入も、実は神ご自身による裁きなのだ。

1月14日 今日に通読箇所 アモス書3章1～8

「真の原因」

何事にも原因、理由がある。誰にも分かる明らかな原因も、隠れて見えない原因もある。[3～8節]は「原因と結果」の原則をくり返し教える。そしてイスラエルを襲う戦争その他の災害は「神の裁き」という、隠れた真の原因があることを示す。しかも神は「予告なしの不意打ち」はなさない。必ず預言者を立てて警告する。アモスはその預言者の一人なのだ。原因が分かれば対策も分かるのが原則だ。イスラエルは神の警告を聞いたらずちに悔い改めればいいのか。預言者は神に示されてそれを警告し、また勧告するのだ。この原則は今の我々にとっても事実だ。預言者の言葉に注意せよ。

1月15日 今日に通読箇所 アモス書3章9～15

「軍隊の略奪」

アッシリヤは北方の、エジプトは南方の大国であって、彼らはイスラエルのサマリヤに軍隊を送って占領し「大騒ぎと暴虐」を行い、宝物を略奪した。しかし今、彼らの王国と宮殿は荒らされ滅亡するとアモスは言う。(いま我々はツアーでその廃墟を見学できるのだ)。この時サマリヤ人は神の哀れみによって全滅を

免れ、地震から逃げる者のように、壊れた家具のはしきれを持って逃げ出した。しかし実はサマリヤにも多くの罪があった。神はやがてこれをも罰し清める。そこにあるまじき偶像の祭壇も、またそんな状態のなかでもいつの間にか建てられた、贅沢な「象牙の家、大きな家」も破壊される。サマリヤの、また外国の裁きは、栄光の神の国出現の準備なのだ。

1月16日 今日に通読箇所 アモス書5章1～13

「主を求めよ」

この章には「あなたがたはわたしを求めよ、そして生きよ」という勧めが2回、また「善を求めよ、悪を求めな。そうすればあなたがたは生きることができる」というメッセージが反復して語られている。実にこれこそが命の光なのだ。反対に5節のように、あちこちの偶像や迷信に助けを求めてもそれは空しい。また[10～13節]のように、貧民を搾取し、賄賂を取り、耕地を占拠し、立派な家を建てるなど、現世的な成功も空しい。彼らの横行のために正しい者の訴えや言論が封じられて、自由に勝手なことができるようでも、天で神様が見ている限り、一切は空しくなるのだ。真に生きる道は「罪を悔い改め、神を求める」ことにある。これがアモスのメッセージだ。

1月17日 今日に通読箇所 ルカによる福音書18章35～43

「盲人の目が開かれる」

この箇所と19章の最初の記事はエリコの町を中心に起こった出来事である。盲人の名は記されていないが、マルコによる福音書10章を見るとその名がバルテマイと記してある。この人はエリコの町の近くで物乞いをしていた。彼はイエス様が通りかかると「ダビデの子イエスよ、わたしをあわれんで下さい」と言った。人々は彼をたしなめたが、彼は叫び続けた。彼はイエス様を「ダビデの子」と呼んでいる。イエス様こそ待ち望んでいた救い主だとわかったからだ。イエス様は彼に「わたしに何をしてほしいのか」と尋ねた。すると彼は「主よ、見えるようになることです」と答えた。彼は自分がどうなりたいたいのかという事をよく知っていた。人生に対して生きる目標がしっかりしている人は、自分の願いをはっきり語る事ができるのだ。

1月18日 今日に通読箇所 ルカによる福音書19章1～10

「ザアカイよ」

ザアカイはエリコに住む取税人のかしらで金持ちでした。彼はその立場を利用して私腹を肥やしていたようです。イエス様がエリコの町をお通りになったとき、ザアカイはどんな人か見たいと思ったのですが、群衆にさえぎられて見る

ことができませんでした。イエス様を見るために走って行っていちじく桑の木に登りました。イエス様はその場所に来られるとザアカイを見上げて言われました。「ザアカイよ、急いで下りてきなさい。きょう、あなたの家に泊まることにしているから」。思いもかけないイエス様のお言葉に喜んで家にお迎えし、彼は悔い改め主を信じたのでした。「人の子がきたのは、失われたものを尋ね出して救うためである」とあるとおり、イエス様は迷子のようなザアカイを捜し出し「ザアカイよ」と名前を呼んで救ってくださり、また、私たちをも捜し出し救ってくださったのです。

1月19日 今日に通読箇所 ルカによる福音書19章11～27

「ミナのたとえ」

イエス様はエルサレムに向かう途中で、神の国はたちまち現れると思っていた人々に譬話をなさいました。遠い所へ旅に立つことになった身分の高い人が十人の僕に一ミナずつ渡しました。「わたしが帰って来るまで、これで商売をなささい」。一ミナは100日分の労賃に相当するそうです。十ミナもうけた僕は「ご主人様、あなたの一ミナで十ミナをもうけました」主人は彼を褒め「よい僕よ、うまくやった。あなたは小さいことに忠実であったから、十の町を支配させる」と。一ミナをしまっておいた僕は「...あなたはきびしい方で、おあずけにならなかったものを取り立て、おまきにならなかったものを刈る人なので、おそろしかったのです」と言いました。対照的な僕の姿です。主人に対して感謝と信頼を持っているかどうか鍵になりそうです。

1月20日 今日に通読箇所 ルカによる福音書19章28～38

「エルサレム入城」

イエス様がロバの子に乗ってエルサレムに入られた。旧約聖書には、救い主がロバの子に乗って来るという預言が記されている（ゼカリヤ9章9節）。教会ではエルサレム入城の日曜日をパームサンデー（棕櫚の日曜日）と呼ぶ。この後、弟子たちと最後の晩餐をし、金曜日に十字架にかかって葬られる。いよいよ場面は十字架へと向かっていく。多くの群衆が木の枝を切り取って、道に敷きイエス様を歓迎した。祖国が解放されるという記念すべき日、それがメシヤによって実現すると信じていた人々にとっても、入城するイエス様にとってもクライマックスの日だった。それが一転して受難週のはじめになった。エルサレムはイエス様を殺そうとしているパリサイ人の本部であった。イエス様の死が間近に迫って来ていることを感じる。

1月21日 今日の通読箇所 ルカによる福音書19章39～48

「この人たちが黙れば、石が叫ぶ」

弟子たちは主のエルサレム入城に歓喜の声をもって賛美した。しかし、群衆の中にいたパリサイ人たちは、弟子たちを叱るようにイエス様に要求した。それに対してイエス様は「もしこの人たちが黙れば、石が叫ぶであろう」。(40節)と返答し、ご自身が王であることを宣言された。41節以降は三つの出来事が記されている。第一はイエス様がオリブ山からエルサレムを見て泣かれたという出来事だ。イエス様はこれから民の上に起こらんとする悲劇を知っていたからだろう。第二は宮潔めをした出来事で、イエス様が神殿で商売をしていた人々を追い出し「わが家は祈の家であるべきだ」と言われたことである。第三は神殿で大胆に教えたという出来事である。イエス様は殺意を持っている人々の真ん中で、民衆に語られたのである。

1月22日 今日の通読箇所 ルカによる福音書20章1～19

「愛子、隅のかしら石」

祭司長や律法学者は「何の権威によってこれらの事をするのですか」とイエス様に問いました。イエス様は、かたくなな彼らや民衆を前に、譬をお話になりました。農夫たちは主人から送られた僕たちを侮辱し、最後に主人が送った愛する息子を殺してしまったというのです。イザヤ書などに神の民ユダヤ人は神のぶどう畑と表現されています。農夫たちとは彼らの指導者です。神様は預言者を何度も送って導こうとなさいましたが、彼らは悔い改めなかったのです。そればかりか、神のひとり子さえ殺すのです。建築工事夫が侮って捨てた石が実は工事の基となるべき「隅のかしら石」だったという故事のように、神様が送ってくださった救い主イエス・キリストこそ、ユダヤ人にも、すべての人々にも受け入れられるべき「愛子」であり「隅のかしら石」なのです。

1月23日 今日の通読箇所 ルカによる福音書20章20～26

「神のものは神に」

ユダヤはローマ帝国の統治下にありました。神の民ユダヤ人が異邦人に納税すべきではないという愛国心に富んだ人々が大勢いました。逆にローマ帝国の統治に協力的な人々もいました。特にヘロデ党の人々です。イエス様に手をかけようとしていた律法学者、祭司長たちは、政治的宗教的に微妙な点を取り上げたのでした。皇帝への納税が律法にかなっているとすればローマの統治を快く思わない人々の反発を買い、納税はしなくてよいとすればローマへの反逆だと訴えられるということです。イエス様のお言葉は明解でした。デナリ貨幣を使用しているなら、ローマの統治のもとで保護を受けている者として収めるべき

物を収めること、さらに、だれもが神様の測り知れない恵みに生かされているのだから、神様への信仰と従順、感謝を忘れてはいけない「神のものは神に返しなさい」と。

1月24日 今日に通読箇所 ルカによる福音書20章27～40

「復活についての質問」

サドカイ派はユダヤ教の一派であるが、魂の不滅も使者の復活についても信じていない。そこで彼らは申命記25章以下の記事を根拠に、イエス様に質問をした。これに対してイエス様は、神様を信じた人たちは、この世に基盤を置いて生きる者とは異なることを示され、復活した信仰者に罪はないことをはっきり指摘されたのである。したがって、神の子としての命が与えられている彼らは、めとったり、とついだりはしないのである。死人の復活についてイエス様は、ここでモーセの証言を引用している。「死人がよみがえることは、モーセも柴の篇で、主を『アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神』と呼んで、これを示した。」(37節)のである。それはアブラハム、イサク、ヤコブたちが、その魂においてモーセの時代にあっても生きていただけでなく、今現在も復活を待っているということである。そのような意味で「神は死んだ者の神ではない」のである。

1月25日 今日に通読箇所 ルカによる福音書20章41～47

「イエス様の警告」

イエス様の質問は、詩篇を引用し、ダビデがキリストを主と呼んでいるのに、自分がどうしてダビデの子であるかというものでした。人間的に見ればイエス様はダビデの子孫でしたが、神の子です。イエス様は神の右に座する王です。ですからここは、彼らがイエス様をいかに受け入れているかが問われているのです。次に、神の国にふさわしくない信仰態度として、外見のみにこだわる律法学者の例をあげています。彼らは自分たちを格式ある者と見せるために長い衣を着て歩くのを好み、広場で挨拶され、会堂や宴会などで上座に座るのを喜んでいました。また、彼らはやもめたちの家を食い倒し、見えのために長い祈りをしたのです。イエス様はそうした彼らの行動を非難し「もっときびしいさばきを受けるであろう」と警告したのです。

1月26日 今日に通読箇所 ルカによる福音書21章1～19

「地上の視点、永遠のまなざし」

やがて祝福に満ちた神の国が現れ、イエス様を信じる人々がそこで現実に生きるときがくることは聖書の教えです。イエス様は、神の国の現実という、永遠

のまなざしで地上の生涯を歩まれたと思います。地上の視点だけでもものを見がちな私たちは、イエス様のお言葉が、よくわからないことが多いと思いますが、イエス様の永遠のまなざしを思うなら、少しわかりやすくなるのだと思います。レプタ二枚の献金、それは婦人のすべてのささげものでした。彼女の信仰の表れであり、主への感謝と信仰が宝石のように輝いているのです。迫害の嵐で命までも失うこともあり得ます。しかし、耐え忍んで信仰を守り通すなら「髪の毛一すじでも失われることはない」のですし「自分の魂を勝ち取る」のです。神の国という永遠の世界において輝きを持つ価値、ということについて聖書から教えられ続けなければならないと思います。

1月27日 今日を通読箇所 ルカによる福音書21章20～38

「エルサレム神殿崩壊と世の終わり」

弟子たちはエルサレム神殿崩壊と世の終わりは同時だと思い、イエス様にエルサレム神殿の崩壊はいつですかと質問しました。しかしイエス様はこの二つの間には長い時間が経過するので、終わりはすぐに来ない、とおっしゃいました。24節まではエルサレム陥落についてで、これは紀元70年のローマ軍によるエルサレム陥落と神殿崩壊の時成就したと言われています。25節以降はイエス様の再臨と世の終わりについてです。極度の自然界異変に人々は恐れ気を失うほどの混乱の中、主が再臨なさり、しかも罪を裁く方としておいでになるのです。しかし、主にある人々は「身を起し頭をもたげなさい。あなたがたの救いが近づいているのだから」(28節)。やがて救いの完成の時が来るのですから頭を上げて主を待ち望むのです。

1月28日 今日を通読箇所 オバデヤ書1～10

「エドムの裁き」

エドムはエサウの子孫の国で、イスラエル南方にあった。神の裁きのために外国の軍隊がイスラエルに攻め込む都度、火事場泥棒のように一緒に攻撃し略奪した。無意識のうちに神の裁きを執行する国も軍隊もあるが、しかしバビロンにせよエドムにせよ、彼等がそれを誇り、いつまでも繁栄を誇るのを許さない。オバデヤはそれを預言する。エドムはバビロンの同盟国くらいのつもりでいたが、無統制なバビロン軍は勝ちに乗ってエドムにも侵入し、さんざんに略奪した。その後の歴史の中でエドムは亡国の憂き目を見る。イスラエルが回復してもエドムは回復せず、いまなお廃墟のままで、岩窟を掘り抜いた独特の神殿、宮殿などがただ観光客の目を楽しませるだけだ。

1月29日 今日の通読箇所 オバデヤ書13～21

「火事場泥棒」

オバデヤ書は1章しかない短い預言書だ。その内容も、エドムの裁きが専ら語られている。彼等は「イスラエルの禍の日に」その門に入って略奪し、道の辻で見張っていて、逃げて来るイスラエル人を殺した。また彼らの生き残りを捜し出して、褒美が欲しくてバビロンの陣営に拉致した。もともとはイスラエルの先祖ヤコブと、エドムの先祖エサウとは兄弟だったのに、これはひどい話だった。やがて彼等が裁かれるのはまことにやむを得ない。「ひどい話」と言えば、いま世界はひどい話に満ちている。同胞同族の戦争も多い。民衆は情け容赦のない権力者の犠牲だ。その権力者に共通するのは、神を恐れる心がないことだ。しかしやがて彼等も、バビロンやエドムと同じく、最期には恐ろしい神の裁きに直面するだろう。

1月30日 今日の通読箇所 ヨナ書1章1～10

「不従順な預言者」

ヨナは預言者だったが、この日の神様のご命令は気に入らなかった。悪名高い罪の町ニネベ伝道の、危険と成功率ゼロを嫌ったか。イスラエルの仇敵アッスリアの首都に伝道し、祝福を祈るのがいやだったか。とにかく彼は主のご命令から逃げ、東方を避けて西に向かった。ヨッパは地中海に面した港で、いまもヤッフアと呼ばれて繁栄している。彼はそこから乗船し、当時の世界の西の果てタルシシ、すなわち今のスペインに逃げようとしたのだ。しかし結局主の眼は逃れられない。主は大嵐を起こし、彼の乗船は沈没の危険に瀕した。これは神がヨナを罰するために追求するのではない。彼を信仰と奉仕の正道に立ち直らせるための、愛の試練、愛の嵐だったのだ。

1月31日 今日の通読箇所 ヨナ書1章11～17

「大きな魚」

ヨナは自分の不信仰不従順が、乗船仲間の迷惑になったことを知った。そしてさすがに悪びれず、自分を海に投げ込んで神の裁きに渡し、舟を呪いから解放するように申し出た。人々は躊躇したが嵐がやむ気配がないので、気の毒ながらヨナを海に投げ込んで、ようやく嵐と沈没を免れたのだ。ここに神は大きな魚を用意された。魚はヨナを飲み込んでしまった。(魚にもいろいろあるから、動物を生きながら飲み込むケースはいくらもある)。聖書に「神は真実である。試練と同時に、それに耐えられるように、のがれる道も備えて下さるのである。」というお言葉があるが、そのとおり、神はヨナのために、彼が最終的な運命に陥らず、なお生き延びて、悔い改める機会を得られるようにご配慮下さったのだ。